

全建総連 支援対策本部ニュース(No.59)

全建総連 東日本大震災支援対策本部
ニュースは全建総連 HP にも掲載しています。 <http://www.zenkensoren.org/jishintaisaku.html>

岩手県連 東日本大震災犠牲者の合同慰霊祭

東日本大震災発生から4カ月を迎えようとする7月10日、岩手県連は大震災による物故者に対して合同慰霊祭を、岩手県釜石市内の「石応禅寺」で開催しました。組合員本人及び家族合わせて37人の尊い生命が犠牲となりました。その御霊を供養するため、遺族38人、関係者51人の計89人が慰霊祭に参列。全建総連からは、田村中央執行委員長、大江書記次長、中建国保から岩館事務局次長、その他に釜石副市长、全労済岩手県本部長が参列しました。

慰霊祭では、実行委員長挨拶で岩手県連・齋藤徳重会長が、仲間の犠牲を弔い、震災後の安否確認や支援物資支給などで、組合員とその家族を全力で支援してきたことを報告。そして、『震災の復興は我われの手で』を合言葉に、県内の復興支援に努めていく」と述べました。

物故者に対する弔辞では、全建総連・田村委員長、釜石市・野田武則市長（副市长が代読）、遺族代表で小國俊介さんが務めました。



組合員本人と家族37人の犠牲を弔う



お焼香で手を合わせ祈りを捧げる

田村委員長は、大震災によって「世界中の人びとが言葉を失った」と被害の甚大さを述べ、犠牲者に対して哀悼の意を表しました。そして、全建総連は被災地組合の復興に全力で支援していくことを伝えながら「仲間と手を取り合い、亡くなられた仲間の意志を継ぎ、前へ進んでいこう」と述べました。

釜石市長からは、復興の大きな担い手となる岩手県連の仲間が被災したことにお見

舞いし、また、今後の復興支援への活躍を期待しました。

遺族代表で小國正敏さんの長男・俊介さんが両親の最期を語ると、亡くなられた方々の無念に、参列した人たちは涙を流しました。

最後に、被災地組合代表挨拶に立った祝田組合長（岩手県連・大槌建成組合）は、「岩手県連は震災に負けない」と復興に向けて力強く決意を語りました。

なお、全建総連ホームページ（<http://www.zenkensoren.org/>）では、各種の動画を配信しており、今回の合同慰霊祭の様相も配信しておりますので、どうぞご覧下さい。

【小國俊介さんの弔辞】

父・正敏は、1級建築士として地域住民のために働くとともに、地元では消防団に所属していました。

地震直後、事務所を飛び出した父は、消防団の務めを果たすべく、沿岸部の水門の閉鎖作業に取りかかりました。その間も、周囲の住民には「津波が来るぞ、早く逃げろ」と何度も避難を呼びかけていたそうです。

そして、水門閉鎖の最終確認をしていたところ、津波に襲われ、その生命を奪われました。

父の遺体が見つかったのは、震災の約1カ月後です。遺体の損傷は軽度でしたが、うっすら涙を流しているように眠っていました。

母・久子は、遺体のDNA鑑定の末、6月に亡くなったことを確認できました。

私は昨年11月に結婚しました。妻のお腹には、新たな生命を宿しています。生前の両親は、初孫誕生に心踊らしていました。しかし、それも叶うことなく、残念で悔しくてたまりません。

8月に生まれる予定の我が子には、父の勇敢な行動を語り継いでいきます。

宮城県連からの報告

【宮城県連事務長 櫻井 晃 記】

6月27・28日に開催された全建総連の主婦交流集会、7月10・11日に開催された青協交流集会に参加された方々からの「寄せ書き」が7月14日県連に届きました。

会館1階ホールに掲示し、訪れる組合員を励ましています。



掲示された寄せ書き。仲間から力強い応援のメッセージ

震災から4ヶ月が過ぎ、被災地にとっては、4ヶ月経っても傷が癒えないというのが本音のところ、いまだに頻発して起こる地震に気持ちが折れそうになることがあります。今回いただいた「寄せ書き」には“絆” “力” “心はひとつ”という言葉がたくさん書いてあり、たくさんの勇気をいただきました。自分たちはひとりではない、仲間がいるんだと、仲間の大切さを再認識しました。

今月11日、20日間という史上2番目の短さで、東北でも梅雨が明けました。

宮城は、みなさんからの「寄せ書き」を力に、復興に向けて頑張ります。ありがとうございました。